

森林やまがた

No.81

2003 12月

目次

国民参加の森林づくりシンポジウム	2
絆の森整備事業	3
海の幸を育てる森づくり	4
緑の少年団活動報告	
植樹祭に参加して	5
森林国営保険の加入拡大に向けて	6
現地ルポ	
地域材を活かした学校施設	7

センタートピックス

総合的な森林学習の場をめざして	8
平成15年度川村造林記念山形県林業賞	9
山形県の古木・名木	10
公共木造施設	10
業務研修三題	11
丸太価格の推移	12
製材品価格の推移	12

(表紙写真は、山形県庁前駐車場で交通整理に活用される間伐材のバリケード)



国民参加の森林づくりシンポジウム 『併催』第53回全国植樹祭記念「森のくにやまがた森づくり県民大会」開催

調報告を行いました。

・栗田和則氏は、山里の豊かさは森林にかかわる暮らしの中であり、愉しく、豊かに、夢をもつて生きていきたい。農林業の営みを競争から共存の原理に変えていくべきであり、農山村に暮らす自

が必要である。日本人は縄文以来の自然観を心の基層に持っており、支配関係ではなく平等の立場で森に接し、県民の心が結集されれば国民参加への道はそう遠くない。「公益の森づくり」は、そのための第一歩であり、森があるしあわせを誰もが感じ、参加することができるようにする必要があると話されました。

4氏の報告が一巡したあと、どのようにして人と森との一体感をよみがえらせるか、また距離を近づけるかなどを中心にして討論が進み、実感として森を捉えられる取り組みの必要性が議論されました。

▼やまがた森づくり宣言

シンポジウムの締めくくりに、県民参加の森林づくり運動をさらに発展させ、将来に着実に引き継ぐため山形県森林協会の松田堯会長の提案により「やまがた森づくり宣言」が満場の拍手で採択されました。

▼おわりに

三年間にわたる全国植樹祭記念の全てのキャンペーン事業は、本シンポジウムをもって終了しました。今後は、県民全体で支える「やまがた公益の森づくり」運動を力強く推進していく必要があると考えています。

〔県森林課〕

はじめに
森のめぐみ
森があるしあわせ
国民で支える「公益の森」づくりをテーマに

ンペーン事業を締めくくるファイナルイベントに位置づけられました。
▼基調講演
最初に、国際日本文化研究センター教授の安田喜憲氏より、「森と文明の発見」と題した基調講演がありました。

マに、去る十一月十五日山形市平久保の「山形国際交流プラザ」において、国民参加の森林づくりシンポジウム並びに第五十三回全国植樹祭記念「森のくにやまがた森づくり県民大会」が開催されました。

山形県をはじめ、国土緑化推進機構・朝日新聞社・森林文化協会の共催により、全国及び県内各地から会場を埋めつくす四〇〇名の参加を得ることができました。

このシンポジウムは、平成十三年度から三カ年にわたって県内各地で開催された全国植樹祭関連事業の成果を集約し、国民参加の森林づくり運動を強力に推進するための、新しい森づくりのあり方について討論することを目的とし、全国植樹祭キヤ

平和な時代が一万年以上も続いた縄文時代に注目し、縄文人が美しい森と水を守ることに心がけていたという仮説をもとに「森の文明・水の文明」を守る自然観・世界観こそが、平和と慈悲の心を醸成するとの指摘がなされました。これからの森づくりを考えるうえで、示唆に富む内容でした。

▼パネルディスカッション

続いての、パネルディスカッションでは、朝日新聞東京本社編集委員の村田泰夫氏が司会を務め、金山町で暮らし考房を主宰する栗田和則氏、東海大学非常勤講師でフィンランド出身の橋本ライヤ氏、法政大学社会学部教授の田中優子氏、山形大学名誉教授の北村昌美氏の4氏が基

・橋本ライヤ氏は、フィンランド人は「森の民」と自称し、昔から経済的にも精神的にも森に頼ってきた。森は、親からの贈り物、そして子供からの預かり物であると教えられている。人間は、支配者としてではなく、客として生き物達と共存していくべきと強調されました。

・田中優子氏は、江戸時代までさかのぼると、どの地にも様々な手仕事があった。人間は、自然との付き合いの中で、再生循環を図りながら暮らしに必要な手づくり品を作ってきた。現代は、物の循環がなくなり、手を抜くことを良しとする風潮になつてしまったと指摘されました。

・北村昌美氏は、森林の復権を国民参加に望むなら、影をひそめた森と一体感を再びよみがえらせること

絆の森整備事業

温海町で結んだ森林との絆

◆絆の森整備事業とは

森林は、木材生産のほか、国土の保全、水源かん養、自然環境の保全、公衆の保健、地球温暖化の防止などの多面的機能を有しているということが、幅広く理解されるようになりました。

これに伴い、多くの県民の方が森林づくりに参加しようとするなど、新しい動きが出てきています。

県では、様々な県民のニーズに対応するため、森林を「水土保全林」「森林と人との共生林」「資源の循環利用林」の三つのタイプに分けて多面的機能に応じた森林整備を計画的に行うことにしています

このうち自然環境の保全や人の保健休養の機能を有した「森林と人との共生林」の整備を図るため、平成十四年度から、人と森林の関わりをもっと作り出し、森林に対する理解を深めてもらうことを目指した「絆の森整備事業」を立ち上げ、県民の林業体験の場の整備や県民による森林整備への支援を始めました。

県内では、平成十五年現在、六つの市町村で、各種森林整備を実施しており、大変好評です。



「森林と人との共生林」の活用
親子で森林散策(森の案内人のガイド付き)

◆温海町における絆の森整備事業

温海町では、町が主体となり平成十五年度から温海川地区を中心に絆の森整備事業を実施しています。温海町の事業計画は次のとおりで、

実施期間は平成十七年度までの三カ

年間です。

温海町絆の森整備事業全体計画

共生林整備	樹木の植栽・播種	1.50	ha
	雑草木等の除去	7.76	ha
	不良木の淘汰		ha
	枝葉の除去		ha
	計	9.26	ha
附带施設整備(給排水施設)		1	箇所
林内歩道等整備(歩道)		250	m
合計		9.26	ha

◆絆の森整備記念植樹

町では、十月二十六日(日)に、温海川地区で、町民による絆の森整備記念植樹を実施、百本のハナミズキの苗を植栽しました。

当日は、晴天に恵まれたこともあり、会場には、町長をはじめとした地元の有識者から、小中学生、幼児を含めた親子づれまで、老若男女の明るい笑顔が揃いました。

さらに、絆の森整備の趣旨でもある森林と人との絆を回復する象徴として、町内の漁師の方々が、漁を休んでたくさん参加してくれました。

参加者たちは、ハナミズキの苗を抱え、一斉に自分の目指す植栽場所へと散っていきました。

日頃の魚網を鍬に持ち替えた漁師

さんは、大漁を祈願しながら魚を育む森林づくりに汗を流していました。また、時代を担う子供達は、50cmほどの苗木を通して、三十年後五十年後の大樹を見据えているように、自分の名前を書いた木札を、植えたばかりの苗木に誇らしげに結んでおりました。



植えたのは「森林との絆」と「親子の絆」

◆まとめ

植栽した苗木が森林として多面的機能を支えるまでは、長い年月と保育の作業が必要です。森林と人との絆は、まだ細い糸で結ばれたばかりなのです。

〔県森林課〕

海の幸と育てる森づくり



☆平成15年度「海の幸を育む山に緑を」事業について☆

豊かな水環境と漁業資源を守るため、最上川上流部に広葉樹を植えようという活動が、九月二十七日(土)飯豊町源流の森を会場に開

催され、県内各地から百四十九名が参加してボランティア活動を行いました。

豊かな水資源や海と河の

* * *

漁業資源は私達の生活にとって欠かせないものですが、これら水生の生態系が豊かになるためには、下流の生物にとって不可欠な窒素やリン、フラボ酸鉄などのミネラルを提供してくれる上流の豊かな森林の存在が不可欠だと言われています。

近年、こうした森林と川や海の関係が明らかになったことで、漁業関係者による森林づくりなどが行われています。

* * *

県内でも、こうした動きを受けて水環境や漁業資源の保全を目的とした森林整備活動が始められています。が、県内の御寿司屋さんの団体である山形県鮭商生活衛生同業組合(西田辰男 理事長)が中心となって行われている「海の幸を育む山に緑を」事業は全国的にも珍しい取り組みだと言えます。

この事業は、平成十四年度から始められ、昨年は庄内の遊佐町西楯を会場に、松くい虫の被害で失われた海岸林を取り戻すため、地元の小学生などが参加して広葉樹の植栽などを行いました。

* * *

今年度の事業の特徴は、最上川源流である飯豊町「源流の森」で開催

されること、また、昨年遊佐町で種から育てた広葉樹の苗木を貰い受け植栽することで、最上川上下流一体となった緑化意識の高揚を図ったことです。

実施に当たっては、県鮭商生活衛生同業組合、財団法人山形県みどり推進機構、飯豊町、県南漁業協同組合、西置賜漁業協同組合、米沢地方森林組合、西置賜ふるさと森林組合、「魚のすみよい森づくりの会」、東南置賜・西置賜両林業振興協議会で実行委員会を組織し、源流の森などの協力を得て開催しました。

当日は、前夜の雨もどこへやら、すばらしい晴天に恵まれ、児童生徒を含む一般公募者や各団体の関係者などが源流の森野外ホールで一同に会し、記念式典を行いました。

副会長である鮭商生活衛生同業組合沖田副理事長の力強い開会に続き、西田会長から森林を育て、次代に引き継ぐことの大切さについて挨拶があり、置賜総合支庁新野産業経済部長、飯豊町後藤収入役から来賓のあいさつをいただきました。

引き続き、今回寄贈された苗木を育ててくれた遊佐町立吹浦小学校六年高橋郁さんのメッセージを、鮭

商生活衛生同業組合事務局の渡辺さんが朗読し、「みんなの力で森を守る。大切さを参加者に訴えました。」

その後、植樹会場へ移動した参加者は事務局からの植樹方法の説明の後、子供たちが介添えする代表者植樹に引き続き、参加者全員でブナなど現地に適した五種類五百本の広葉樹と遊佐から送られたカシワなどの苗木二種類十本を植えました。

また、植樹後にはトチノキとアベマキのドングリで苗木づくりを行いました。

一時間程度で植栽を終え、心地よい汗を流した参加者達は野外ホールに戻り、鮭商生活衛生同業組合からのお鮭とキリンビール山形支社から提供いただいた飲み物で昼食をとりました。当日は「源流の森文化祭」も併催されており、小春日和のなか、参加者達は楽しい一日を過ごしていました。

* * *

今回の事業で森と川・海に関わる幅広い森づくりの輪が生れた訳ですが、西田会長はこの森づくりの輪を県全体に広めて行きたいと意気込みを語っていました。

〔置賜総合支庁 森林整備課〕

緑の少年団活動報告

鯉川村立牛潜小学校

植樹祭に参加して



ととてもにぎやかで、他の市町村の

六年 三浦貴行
緑の少年団としての大活動、植樹祭に行きました。

実際に行ってみる
緑の少年団の人たち以外にも、たくさん的一般の人たちも来ていました。昨年は天皇陛下をお招きして、かなり盛大なパレードも開きましたが、今日はそのミニ版と言ってもいいようなものです。

さて、こつちに来た所で、話を聞いたりパレードを見るだけで、自分たちはまだ何も行いはしていませんが、午後になって、いよいよ少年団の仕事です。

その仕事は木を植えることでした。やつぱり緑を増やすためには、植樹をしなければいけません。何の木を植えたかは忘れてしまいましたが、これからは、この県、いや世界に緑が増えることを願いながら、この木を植えました。周りを見ていたら、いつか

植えた苗木が、りっぱに成長してました。ぼくはうれしくてたまりませんでした。きつとこもりっぱな森になるだろうと思いました。

そして植樹祭が終了、帰る前にさくらんぼを食べました。赤くて甘くて、とてもおいしかったです。

この植樹祭をして、また一つ、森にふれ合えたような気がします。森だけでなく、山の幸や木、枯れてしまった葉や草花だって、大事にしていきたいです。



六年 三浦菜々
山形県中の緑の少年団が集まり、「緑を増やそう」とみんなの心が一

つになる、植樹祭に行きました。

私は、「鯉川村緑の少年団」というプラカードを持ちました。行ってからすぐ練習をしました。大豊小学校、鯉川小学校の人といっしょにやります。歩く時やプラカードを上げるときなどを細かく指示されました。指示されている時はあまりきんちようしませんでしたが、練習が終わるとどきどきしてきました。

お昼ご飯を食べる時にはみんなで食べました。牛潜小から私だけが練

習に行っていたので心細かったのですが、みんなといっしょに食べたので元気が出ました。

いよいよ本番です。まち時間が長くて、とてもきんちようしてました。でも、ほかの学校の人から声をかけられて、元気ができました。出る場面までずっと話をしていたので、出る場面もあまりきんちようせずできました。だんの上に立つと、人が多くてぞくぞくしましたが、だんからおりるとほっとして、さすがに良かったです。今まで思いつめていた事がなくなつたので心がすうーとなりました。

植樹祭で友達ができるなんて思っていたいなかったで、うれしかったです。

来年は中学生になって、緑の少年団はありますが、緑を大切にすることが忘れずにがんばっていききたいです。



六年 三浦由佳
私は、鯉川村の緑の少年団にはいり、活動をしています。山形に少し

でも多く緑をふやすために、緑の少年団のみんなががんばっています。

なので、植樹祭に行くのは、とても楽しみでした。

会場は、緑がたくさんのもてもきれいな場所で、空気もすんでいて、とてもすばらしい所でした。このように緑が多い場所をもっとたくさんふやしたいと思いました。他の小学校の緑の少年団に入っているみんなも、もつと緑をふやしていきたいと思っています。緑をふやしたい人などと思いました。

植樹祭では、私達が木を植えました。私が植えた木は、ブナという木です。まだ、小さい木でしたが、きつと大きくなって、りっぱで、みんなに親しまれる木になると思います。ブナの木がりっぱな木になるのがとても楽しみです。

中学校では、緑の少年団はありませんが、私が緑をふやしたいという気持ち、きつと変わらないので、もつと木を植えたりする活動をしたと思います。そして、私がすんでいる所も緑がたくさん場所です。それで、このすばらしい緑がなくならないようにしていきたいです。

植樹祭で緑をふやしていこうという気持ちが強くなり、それを少しでもだけこれぞできたのでよかったです。

森林国営保険の 加入拡大に向けて

はじめに

森林国営保険をご存知でしょうか。万一あなたの森林が災害により被害を受けた場合、その損害を補償する制度で、火災、風害、水害、雪害、干害、凍害、潮害、噴火災の八つの災害から森林を守ります。現在、森林火災以外に、気象災、噴火災までを総合的に対象とする保険は、唯一森林国営保険のみとなっています。

森林国営保険に加入できる森林は、全く人手の入らない天然林や竹林以外の森林で、樹種、林齢、面積などに制限はありません。

森林国営保険は、災害を受けた森林所有者が安心して林業経営を維持でき、さらには、円滑に森林災害の復旧ができるよう、国が責任をもつて運営しています。

森林保険への加入状況

近年の加入率（加入面積／民有人工林面積）は、減少傾向にあります。

過去三年間の森林国営保険又は全森連共済（平成十三年度以降は新規引受を停止）への加入率を全国平均

でみると、平成十二年度が二〇・一パーセント、平成十三年度が十九・四パーセント、平成十四年度が十八・六パーセントとなっています。

山形県の加入率は、平成十二年度が十四・九パーセント、平成十三年度が十三・九パーセント、平成十四年度が十二・七パーセントとなっており、全国平均と同様年々減少しています。

森林保険への加入率が低下している要因として、

ア 木材価格の低迷による林業収入の低下など、林業を巡る情勢が著しく悪化し、林業への意欲が低下していること

イ 不在村森林所有者の増加により森林への関心が薄れてきていること

ウ 造林面積の減少により、被害の発生率が高い低年齢級の人工林が減少していること

等が考えられます。

また、山形県においては、全国的にみても災害が少なく、森林保険への

の認識が低いのが現状です。
損害てん補の状況

山形県は災害の少ない地域とはいえ、毎年災害は発生しており、その際には保険金をお支払いし林業経営のサポート役を果たしています。

過去三年間のでん補状況の平均をみると、件数は四十件で、支払われた保険金は千六百万円となっています。最も多い災害は雪害で、保険災害の約八割を占めています。ほかに



は、火災、水害、干害により保険金が支払われています。

まだ記憶に新しいところでは、平成十二年四月、大江町で融雪による大規模な地すべり災害が発生し、保険に加入していたため、四百三十二万八千円の保険金が支払われています。

さらには、平成十三年一月の大雪により六十八件の損害報告があり、約千八百七十八万七千円の保険金が支払われています。

おわりに

森林国営保険は、森林の再生と林業経営の安定化に重要な役割を担っており、これを維持していくためには、より一層の加入拡大を図り、加入率の減少に歯止めをかける必要があります。

山形県では、平成十四年度、「山形県民有林造林補助事業実施要領」に努力規定ながら森林保険への加入について記載し、造林事業で整備した森林の保護管理を図ることとしました。

これを機に新植はもちろんですが、除・間伐実施林の加入拡大に努めていきますので、ご理解をいただき、森林国営保険の加入拡大に一層のご支援ご協力をお願いいたします。

地域材を活かした学校施設

鶴岡市立湯野浜小学校完成

湯野浜小学校は、湯野浜海水浴場のすぐ近くに位置し、目の前に日本海が広がり、遠方には鳥海山を一望できる自然環境にあります。鶴岡市は、旧校舎の老朽化に伴い、平成十四年度から改築計画を進め、今年八月に新校舎の完成のはこびとなりました。

改築された新校舎は、全体が波のイメージを想わせるゆるやかなカーブを描いており、校舎内には「海に見えるランチルーム」、「すばらしい



新校舎外観



地域材を活かした校舎内部



動物の飼育小屋付き用具庫



木製デッキ

眺望の展望室」、「各教室に隣接する多目的スペース」など特色のある施設が配置され、羨ましいほどゆとりのある教育空間を創造しています。今回改築された校舎の主要構造は鉄筋コンクリートですが、内外装に木材をふんだんに使用しており、特に地場産の木材を多く取り入れているのが特徴です。地域材は、田川産の杉を中心に約三三〇㎡を利用し、

机・イス・家具にもできるだけ木製品を使うことで、温もりとやわらかさを感じさせる校舎となっています。また、今回の改築に伴い、外構施設である「木製デッキ」と「動物の飼育小屋付き用具庫」を林野庁の補助事業により整備しています。色々な学習活動に利用する「木製デッキ」は、腐朽抑制対策として地元ヒバ材を利用しており、「用具庫」は地域材の良さを十分アピールできるように地元スギ材を積極的に利用した建物となっているのが特色です。近年、木材が教育環境にとって優れた素材であることが様々な面で明らかになったことから、学校施設に

「木造化」、「内装の木質化」を導入する学校が多くなってきています。しかし、安価でいつでも入手できる木材が多く使われ、地域材の利用状況はまだまだと言わざるを得ません。今回の湯野浜小学校における地域材利用は、木材の調達や価格、納入時期等など様々な問題に対して、関係者が一丸となり努力した結果成したものです。関係者に敬意を表するとともに、循環型資源である木材の良さと省エネ資源である地域材利用の意義を広くPRし、公共施設への地域材利用促進に役立つ先進例になるものと期待しております。

〔庄内総合支庁森林整備課〕

西川町沼山には、約六十五畝の面積を持つ森林研究研修センター試験実習林があり、現在、試験研究や研修の場として利用しています。この一部を総合的な森林学習・研修の場として活用するため、独自のプログラムやアクティビティ（プログラムを構成する個々の活動）と簡易施設の内容や配置について検討していますので、その概要を紹介いたします。

◆森林は最良の野外教室

森林は、物質の循環や生物間の相互作用、生命活動などによって成立し、水や空気、土壌などとともに森林生態系というすばらしいシステムを形成しています。人間は、このシステムの掟に従って、木材や森の恵みを受容し、また文化も形成してきました。この相互関連性や総合性が、森林が最良の野外教室と言われる所以です。

◆森林学習の相互関連性

当センターで現在行っている研修を大きく区分すると、①森林環境教育に関するもの②森林管理技術に関するもの（後継者育成、機械講習含む）③森の案内人などの指導者養成

の三つになります。これらの研修は、それぞれの目的で実施していますが、究極のねらいは「持続可能な森林経営」であることから、一つのエリア内で、それぞれの研修を関連性を持たせながら実施することが理想です。例えば、森林環境教育のアクティビティとして作業体験も必要ですし、また森林づくりの一環で、森林の更新や森林と環境の関連について学ぶことも不可欠です。このことから、総合的な森林学習を考えた場合、一つのエリアにさまざまな樹種、林齢階層構造等を持つ森林が配置されている試験実習林を活用するメリット



「森林環境教育指導者研修」
高木性の樹種の本数を調べる

は大きいといえます。

◆プログラム設定等の考え方

計画にあたっては、「森林の中で、遊び、体験し、森林を科学的に見つめる」ことを基本に、学習者の年齢や経験等にに応じて選択できるプログラムやアクティビティの設定を目標にしています。特に、「科学的に森林を見つめる」プログラムは、私たちをとりまく森林が今どういう状況なのか、今後どのように変わっていくのか、理論付けて考えるためには不可欠です。また、公園的要素を排除し、自然の状態の森林を教材とするため、歩道をはじめとする簡易施設は最小限の整備とする方針です。

◆森林を見る視点が肝心

森林は、高さや広がりを持った巨大な存在で、長い年月の中で形成され、また世代交代をしています。そのため、森林の構造の違いや、更新や遷移など森林の時間軸に合わせた視点で考え観察するプログラムを設定することも課題です。そこで、今年度から、広葉樹の森林の中に設定した実生更新の試験地を、学習の場として森林環境教育研修などで活用しています。この森林は、現在は利用されなくなった旧薪炭林で、外見は何の問題もないのですが、中に入



「愉快的な山づくり講座」
ナタを使っての枝打ち

ると高木性の稚樹は少なく、更新の可能性が危ぶまれています。これは、現在多くの里山林が抱える共通の問題でもあります。このような、現実の森林を時間経過に基づく視点で観察し考える教材を、「持続可能な森林経営の推進と資源循環型社会の構築」への理解を深めるプログラムとして、積極的に活用する方針です。

◆まずは森林の中に入ること

森林の中に入って感じるあの何ともいえない落ち着いた気分。森林と現代社会が乖離する中で、私たちの心の中にある自然感を復興させるには、まずは森林の中に入ることです。それが、森林を知る第一歩につながることを思いながら、楽しい森林学習の場を設定する計画です。

〔森林研究研修センター〕

土田和一郎氏・加藤周一氏に決定

川村造林記念山形県林業賞は、民有林の林業の振興に顕著な功績があった個人または団体に贈られる最高の賞です。

本年度は、西川町から推薦のあった土田和一郎氏と鶴岡市から推薦のあった加藤周一氏が受賞者として決定しました。

去る十一月二十六日に開催された平成十五年度山形県農林水産祭式典では、お二人の功績を称え、知事から表彰状が授与されました。

お二人の主な功績は次のとおりです。

【土田和一郎氏】

氏は、西山スギを生産する西川町において、西川町森林組合常務理事、西村山地方森林組合長、西川町議会議員（六期二十四年間、うち二期八期間は議長）、山形県森林組合連合会会長など多くの要職を歴任しています。

この間、西村山地方森林組合の合



土田和一郎氏

併に尽力され、また、組合員の要望に応える経営方針を掲げて造林作業の充実を図り、林業公社造林や西川町営造林等の機関造林の推進に多大な力量を発揮されるなど、西川町の民有林人工造林率の向上に大きく貢献されました。

さらに、林業構造改善事業等の導入を図りながら、施設の近代化及び技術の研鑽、林業労働者の就労環境の改善、担い手の育成などに強いリーダーシップを発揮しました。

また、個人的にも地域の篤林家として人望が厚く、早くから計画的に

拡大造林を進め、経営面積四十三haのうち人工林比率は五十三%で、西川町平均の三十八%を大きく上回っています。経営人工林は、ほぼ保育が完了し、収益間伐と主伐を待つ林に仕上がっています。

経営基本目標は、八十年以上の長伐期施業とし、今でも多忙な要職の合間に地域の模範となる山づくりを実践しています。

【加藤 周一氏】

氏は、田川林業地の中心をなす七十haに及ぶ所有林において、長伐期優良大径材の生産を目標とし、計画的な除伐や枝打ち、間伐を実施しながら、単木択伐施業による持続的かつ先導的な林業経営を行っています。

また、林内の高密路網の整備や機械化による生産コストの低減を図りながら、生産から加工、販売まで一貫した山直販売システムによる立

木販売を確立するとともに、バイオマスエネルギーに注目するなど、常に新しい林業の方向を開拓しています。

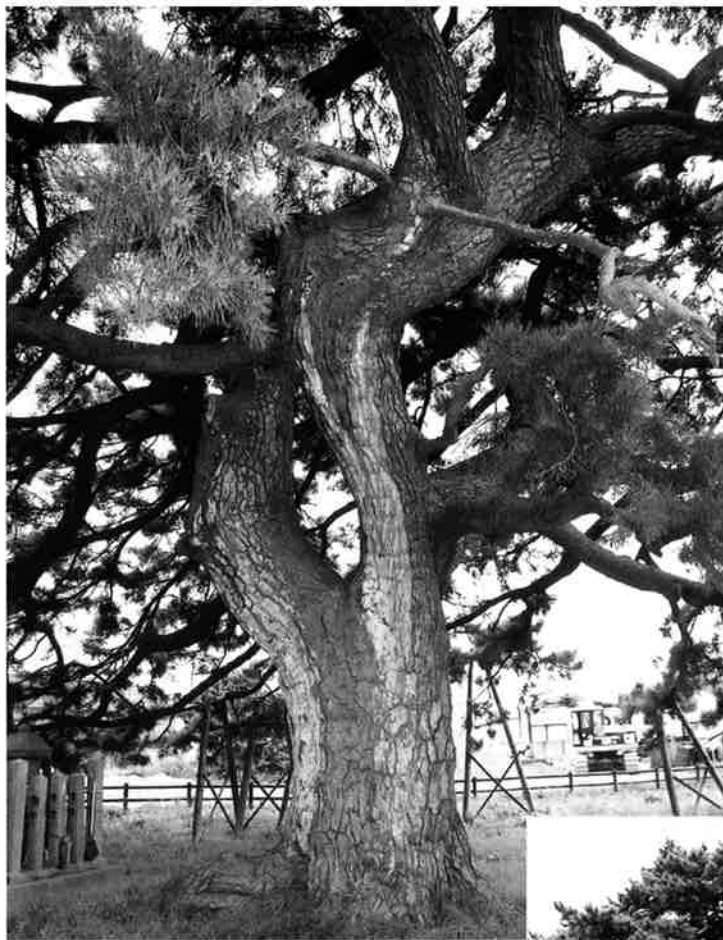
平成十四年度には、庄内地方の林家、製材業、設計士、大工・工務店、金融機関といった家づくりに関する異業種で構成する「庄内の森林から始まる家づくりネットワーク」の設立に貢献し、現在、事務局長として他の会員を牽引しています。

また、地域においては、庄内地方の普及指導協力員として活躍しながら、所有山林を会場として市内の小中高校生や一般市民に森林の育て方や大切さをわかりやすく教えるなど、各種森林・林業教室の講師として森林環境教育の分野でも積極的に活動しています。

〔県森林課〕



加藤周一氏



に移住したころ植えられたといわれる。後に山形県庄内藩主酒井侯の藩邸に移植されたが、夜な夜な女の泣き声を発するので気味が悪くなり六面地蔵を添えて植え戻した。それからこの松を地蔵の松というようになった。
〔山形県森林協会〕



この払田の松は、樹齢約三七〇年のクロマツで、根回り四・三メートル、目通り幹囲三・九メートル、樹高十・八メートルあり、昭和三十三年七月二十五日に山形県指定天然記念物に指定されている。
備前の国の池田侯一族が当地



(案内略図)



公共木造施設④

河北中央公園
ふれあい館

河北町谷地中央三丁目

完成年度 平成13年度
延床面積 216.96㎡
構造 木造平屋建て
問合せ 河北町都市整備課
特徴

屋根景観を内部空間にも反映させ、地元産西山材をふんだんに使い、木の肌触りと温もりを感じて頂けるよう配慮されている。



業務研修二題

山形県森林協会では、本年度事業の一環として、業務研修を開催したのでその状況をお知らせします。

森林整備の実務

本年度の研修は、九月十一日、県森林研究研修センター及び大江町の地すべり災害現地で行われました。

一 目的

市町村行政が森林整備に果たす役割の重要性に対処し、森林整備に関する基本的な知識・技術の習得により業務の円滑な推進を図ることを目的としています。

二 主催

山形県森林協会

三 後援

山形県森林課

四 参加者

市町村職員三十一名、県職員九名、林業団体職員三名 計四十三名

五 研修項目及び講師

- (1) 森林整備と林道について
 - ・ 県森林課 藤井森林技術主幹
 - ・ 県森林課 梅津林道整備主査
- (2) 地域防災対策と治山について
 - ・ 県森林課 石川森林保全主査
- (3) 現地研修



六 研修所見

・ 県森林課 大泉技術管理専門員

- (1) 研修の内容は、林道の必要性、整備の現状、林道開設事業の種類と採択要件、災害復旧の概要、費用対効果、ふるさと林道、森林整備と市町村の役割、治山事業の概要、地域防災の考え方等でしたが、ほぼ理解され、特に、路網整備が市町村行政の重要施策となることの認識が高まったと考えています。
- (2) 現地では、大江町貫見の地すべりの規模の大きさと、復旧に使用した多量の木材に驚愕するなど、改めて地域防災の重要性と木材利用の有効性を痛感した次第です。
- (3) このような業務研修は、今後とも継続して実施する必要があります。

「商売の「コツ」」

「販売戦略のたて方」

本年度の研修は、九月十八日、山形森林総合センターでおこなわれました。

一 目的

経済活動を行うには、顧客のニーズを把握し、マーケティングを促進するとともに、積極的な営業活動が展開されなければなりません。

このため、商業経営の基本的な知識や技術並びにノーハウを習得し、

有利かつ効率的な営業活動ができる人材を養成・確保することを目的としています。

二 主催

山形県森林協会、山形県木材産業協同組合

三 後援

山形県森林課、最上村山・庄内・置賜流域林業活性化センター

四 研修項目及び講師

・ 販売のコツ 加藤総務課長

・ 販売戦略のたて方 佐藤総務部副部長

五 参加者

森林組合役員、木材業職員、県職員、その他 計七十六名

六 研修内容

時代の変化への人・物・金の対応能力開発と人事制度。商品と物流。販売のコツ。(利益のとれる主力商品を決める。有望な育成商品を決める。客のニーズを把握する。実行して何が問題なのか多角的な検討を加える。)

講師の豊富な経験から実のある話

が聞けました。結局「商売は地道な研究と努力」、「売るといふ執念」、「活発な行動力」に尽きます。森林組合等は、森林・林業・木材産業の専門家ではありませんが、一般には商業活動が不得意部門とされており、せつかくのビジネスチャンスが生か

七 研修所見

しきれない場合があります。この面での強化策が必要であります。

〔山形県森林協会〕



確定利回りの1年貯蓄



半年複利の5年貯蓄



運用ニーズに応える



農林中央金庫 山形支店

〒990-0042 山形市七日町3-1-11(市役所向い) TEL. 023-641-6272

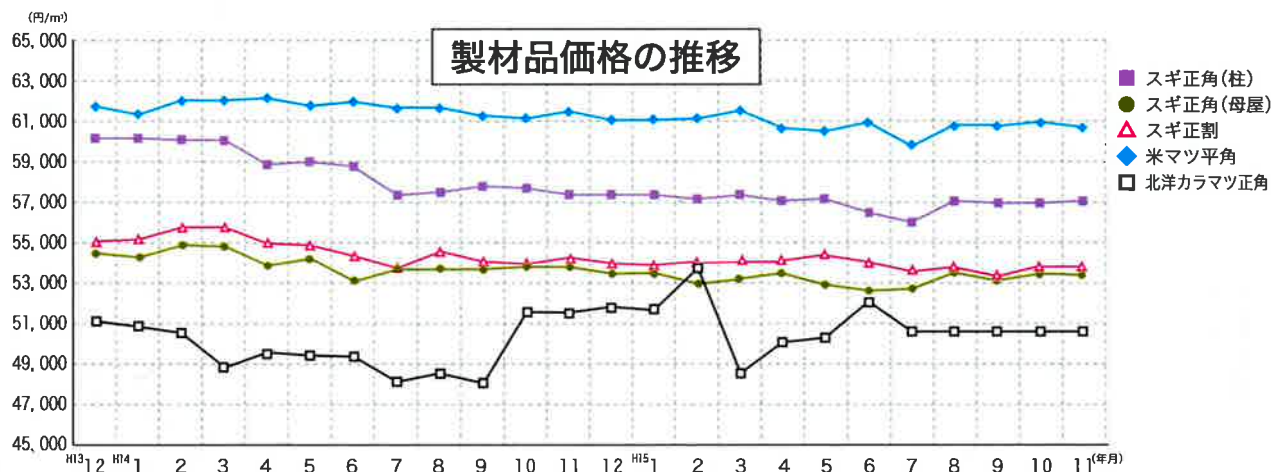
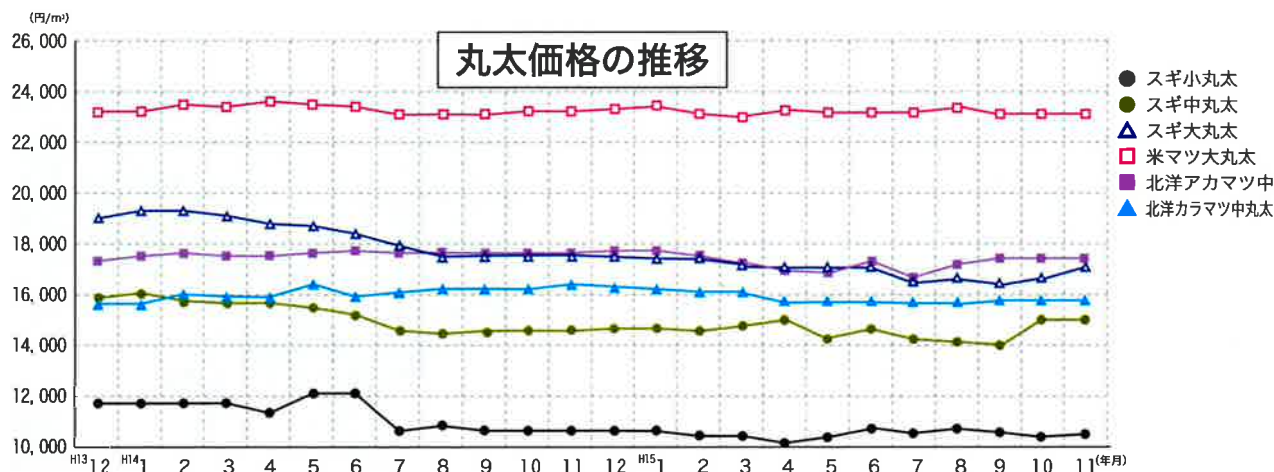
農林債券・投資信託等に関するお問い合わせは

全国コールセンター



0120-345-526

9:00~17:00(土・日・祝日除く)



印刷所

渡辺活版所

定価

一部二〇円

森林やまがた12月号 平成15年12月1日発行 通巻第81号

監修 山形県
編集・発行 山形県森林協会
〒990-0045 山形市桜町2-35 林業会館内
TEL 023-631-6566 023-622-8823
FAX 023-631-6573

「ゆとり都」森林課ホームページ <http://www.pref.yamagata.jp/10/100520.html>

訂正 二〇〇三年十一月号十一頁
一段目の左から七行の文章について次のとおり訂正します。

・訂正前 小学校六年垂石歩君
・訂正後 小学校六年垂石歩さん

古紙配合率 100%再生紙を使用しています